



命しらずのドワーフ亭

written : 十織

君は平均的なドワーフだ。平均的なドワーフとは、ずんぐりした小柄な体格をして、鼻が赤く焼けていて、長い髭を伸ばしていると相場が決まっている。慎重だが忍耐強く、友人には忠実で、ほんのちよっぴり酒と紫煙に目がなく、地面に眠る黄金を渴望しており、そしてトロールがだいきらいだ。

誰かに雇われて坑道を掘る者もいれば、ドワーフ同士が徒党を組んで鉱脈を広げることもあるし伝説のハンガールのように、黄金を掘り当てることを求めてやまない者もいる。

ドワーフは一日の大半を地面の下で過ごし、泥と煤だらけの格好で地上に戻ったあとは、安いエール酒を存分に飲み、パイプに詰めたたばこの煙をたっぷりとくゆらせて過ごす。オークやトロールを前にすれば、たちまち賞賛に値する戦士になる。ドワーフの生涯というものは戦い、飲み、掘ることの繰り返しに見えるが——彼らがそのことに不平を言うのを聞くことなどないだろう！

ひと仕事を終えた君は、なかまたちと一緒に乗り組んでいた平底船から、栈橋に降りる。ほんの短い時間であっても、君にとって地面を離れるのは快い体験ではなかったが、船の後ろに牽かれた筏に積まれている、ずっしりした木箱の数々を見て満足する。

波止場には、君の雇い主が待っている。彼は満足げな様子で召使いに命じると、君たちの働きにふさわしい量の金貨が詰められた皮袋を手にとらせる。ずっしりと重い皮袋を手にして、君たちはにぎわいながら袋の中を覗き込んだり、金貨を取り出して夕日にきらきら光らせたり、なかまの肩や背をばんばんとたたいたりしている。

じきに日が暮れる。波止場のまわりは、にぎや

かな店や、騒々しい店や、いかがわしい店で囲まれている。君は皮袋のひもをきつく縛り、ふところのかくしにしまうと、いつものように無言で考え込んだ。そして考えついた。

「命しらずのドワーフ亭」と呼ばれている店がある。店の名前は別にあるらしいが、有名なのはこちらの呼び名のほうだ。

うわさはごく短いものだ。この店ではドワーフ以外には楽しい酒がふるまわれて、ドワーフには命がけの酒がふるまわれると言われているのだ！

たいていのドワーフにとって、そこらの店でふるまわれている酒やたばこは上品で物足りないものだ。頭蓋砕きと呼ばれるような、がつんとした逸品はそうそう扱われるものではないが、水かミルクのような液体に、せっかくの金貨を支払うのはもったいない。

波止場に面した広場から、裏通りを何本か奥に入ったところに、看板もない入り口が開いているのを見つける。降りた先が明るくなっているのがわかる。

夜目が利くドワーフは、暗くても階段を踏み外すことはないが、一段一段が高くつくられていて君をむかむかさせる。階段というものは、もっと足が短い者に配慮したつくりをしているべきなのだ。ようやくといった体で降りると、すすけた煙をのぼらせる火がいくつも灯されていて、坑道の明るさを思わせる。

客は多くもなく少なくもない。正面の奥にはカウンターが据えられていて、いかつい顔をした店主から、おやドワーフが来たぜとでも言いたげな視線を向けられる。後ろには酒瓶や酒樽が並べら





れている。厨房は奥にあるようだ。誰がスイカとフライドチキンなど注文するものか！と怒鳴りつけたくなるのをこらえた君は、店内にぐるりと目をむける。

右手の奥には低い舞台があるが、こんな荒っばい港町で芸といえば、調子っぱずれの吟遊詩人の戯れ言や、大根役者の三文芝居を披露されるのがせいぜいだ。へたくそな軽業師や曲芸師なら、芸よりも芸の失敗で人気が出ることもある。

他の客たちも、君に気がついたらしい。それまで穏やかだった店がにわかにざわつく。そんなにドワーフが珍しいかと鼻息を荒げるが、酔っ払いたちは君に好意的でどいつもこいつも手をあげると、空いている席にこいよと招いてくれる。舞台に近いあたりを、特等席だと案内される。

椅子にすわるや、景気づけにどうだねと、ジョッキが何杯も差し出される。エール酒は安く強いだけのしろものだが、ほろよい気分になった君はすっかり機嫌をよくする。

うまそうな料理の盛られた皿が、つぎつぎと運ばれてくる。ほかの客が注文した品もあれば、君が頼んだ肉汁たっぷりのアードルフ・ジョイントや、香草が乗せられた山盛りのロースト・グラニットも並んでいる。お前らも食えとまわりの客たちにすすめながら、君はドワーフらしい健啖ぶりを披露する。

気がつくと、いつのまにか客が増えていて、店はずいぶんぎやかになっている。入り口のまわりは人垣で外に出るすきまもないほどで、こんなに人気がある店だったのかと驚かされる。そのあいだも酒が振舞われて、料理が盛られて、空いた皿や瓶、空になったジョッキがテーブルや床に転がっていく。

ポート・ブラックサンドで最近人気になっている娯楽が「命知らずのドワーフ亭」だ。ドワーフ

投げやピクシーしぼりは、すぐに材料が不足してしまうから、もっと仕入れを楽にしようと、店主のハートマンが考案したという。

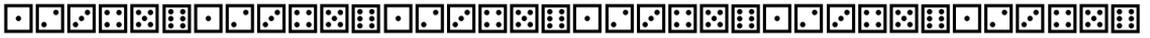
客たちは楽しい酒を飲むことができ、ドワーフは無料で飲み食いできて、店はいくらでもドワーフを仕入れることができるという寸法だ。店主からこの話を聞いたとき、トロールたちはその天才的なひらめきに「すてき！」と叫んだという。

トロールはどこにでもいる、醜くておおざっぱで頭の悪い生き物だが、彼ら自身は自分たちを創造神ハシャクが最初につくりあげた存在だと信じている。自分たち以外の種族をすべて見くだしているが、特にドワーフのことをちびた生き物だとみなしている。ドワーフなどというものは、ひねてしみたれてひしゃげていて、気が向いたときに殴りつけるのがいちばんな存在だと、彼らなりに正當に評価している。

酔っ払いたちがはやし立てる。君は舞台のすぐ前で観覧することができる。やってきたのは「荒くれザークの再来」と評判のトロールたち、メイベリーとゴーマーパイルの二人組だ。彼らは店で三代目の芸人だが、これまででいちばん長く続いている。

舞台上上がったトロールたちは、君の姿を見つけると、にやにやした不快な笑みを浮かべる。顔はいぼだらけで、髪の毛はぼさぼさだ。だらしなく開いた口からは、並びの悪い牙や、だらりと垂れた舌がのぞいている。臭い息がここまで届いてくる。トロールのユーモアといえば、表現がぐどく、内容は粗野で、君のようなドワーフに誤解されやすいことで知られている。





トロールのユーモア

「なあ相棒、あんなところにドワーフがいるぜ」

「小さくて俺には見えねえぜ。へっ、へっ」

「なあ相棒、ほんとうにドワーフがいやがるぜ」

「ばかいうなよ、あんなぶさいくな生き物がこの世にいるわけねえさ。へっ、へっ」

「なあ相棒、やっぱりドワーフがいるぜ」

「どおりで、ずいぶん臭えと思ったぜ。へっ、へっ」

「なあ相棒、どうしてドワーフはあんなにチビなんだ？」

「そのほうが蹴とばしやすいからさ。へっ、へっ」

「なあ相棒、それにしてもドワーフはチビじゃねえか」

「踏んづけられすぎて小さくなったのさ。へっ、へっ」

「なあ相棒、なんでドワーフがヒゲを伸ばしてるか知ってるかい？」

「俺がむしるためさ。へっ、へっ」

「なあ相棒、あいつドワーフのくせにメシを食ってるぜ」

「そいつは残念だ、いくら食ってもドワーフなんて臭くて食べねえのにな。へっ、へっ」

「なあ相棒、なんでドワーフが酒なんか飲んでるんだい」

「ママのおっぱいのかわりさ。へっ、へっ」

「なあ相棒、ドワーフはたばこも吸うらしいじゃねえか」

「ママのおっぱいのかわりさ。へっ、へっ」

「なあ相棒、あそこにあるタルにドワーフを詰め込むにはどうしたらいい？」

「むりやり詰め込むのさ。へっ、へっ」

「それじゃあ相棒、1ダースのドワーフをタルに詰め込むにはどうしたらいい？」

「ひきにくにするのさ。へっ、へっ」

「なあ相棒、ドワーフと俺のハナクソのどっちが小さいかわかるかい？」

「おんなじくらいさ。へっ、へっ」





「なあ相棒、ホットドッグが食いてえのにケチャップが足りねえぜ」

「そこにドワーフがいるじゃねえか。へっ、へっ」

「なあ相棒、ソーセージも足りねえんだ」

「そこにドワーフがいるじゃねえか。へっ、へっ」

「なあ相棒、ドワーフを蹴とばすなら右足と左足のどっちでやればいい？」

「両方さ。へっ、へっ」

「それじゃあ相棒、ドワーフをぶんなぐるなら右手と左手のどっちがいい？」

「手が汚れるじゃねえか。へっ、へっ」

「なあ相棒、ドワーフとオークとゴブリンがいて、ハンマーが2つあったらどいつをなくればいい？」

「ドワーフを2回なくるのさ。へっ、へっ」

「なあ相棒、あのドワーフずいぶん機嫌が悪そうじゃねえか」

「そりゃあ、ドワーフなんか生まれちゃったら機嫌も悪くなるさ。へっ、へっ」

「なあ相棒、ドワーフが立ち上がりやがったぜ」

「立ち上がってもチビのままさ。へっ、へっ」

「なあ相棒、ドワーフがこっちにきやがったぜ」

「そいつはたいへんだ。うっかり踏んづけたら靴の裏にへばりついたガムになっちゃう。ガムは食えるけどドワーフは胃にもたれるから始末に悪いじゃねえか。お前もそう思うだろう？ なあ、ドワーフ」



この作品は「安田均・他/グループSNE」及び「グレアム・ボトリー、スティーブ・ジャクソン、イアン・リビングストン」が権利を有する『アドバンスド・ファイティング・ファンタジー第2版』の二次創作物です。

ADVANCED FIGHTING FANTASY 2nd Edition
Copyright © Graham Botley, Steve Jackson and Ian Livingstone, 2011
Japanese version copyright © GroupSNE, 2018

